

もうひとつのWONDERS



Christopher

クリストファー

げんだい かんそく 現代の最新の観測により、わたしたちが用いている天体の名称に、

新しい解釈が必要となってきた。

これは、特に「惑星」についてあてはまる。

「惑星」とは、かつて空をさまようように動く光の点に見えたことから

「惑う星」という意味でつけられたが、

最近のかずかずの発見により、

わたしたちは新たに「惑星」の定義をすることになった。

——国際天文学連合決議（2006年）より

● ● ●

だれのせいでもないけれど

ぼくらは地球を去る

これからもずっと、変わらずにいられるのだろうか？

——ヨーロッパ『ファイナル・カウントダウン』より

涙の国って、ほんとうに不思議なところだね。

——アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリ『星の王子さま』より

はじまり

ぼくがはじめてオギー・プルマンに会ったのは、生まれて二日目のときだった。当然、自分では覚えてなくて、そのときはママから聞いた。ちょうどママとパパがはじめてぼくを病院から家へ連れてきたときで、オギーの両親もはじめてオギーを病院から家へ連れてきたところだった。だけど、そのときオギーはもう三か月。息をしたり、飲みこんだりすることができるよう、いくつも手術を受けたから、ずっと病院にいなきゃならなかったんだ。息をするとか、飲みこむとかいうことを、たがいの人は気にしたこともない。生まれつき自然にできるからだ。けれど、生まれたばかりのオギーには、自然にできることじゃなかった。

ぼくたち二人をひき合わせようと、パパとママはぼくをオギーの家に連れていった。オギーはリビングでたくさんの医療機器いりょうきにつながっていた。ママはぼくを抱きあげ、ぼくの顔をオギーの顔に近づけた。

「オーガスト・マシュー・プルマンくん、この子はクリストファー・アングス・ブレイクよ。新しいけど、一番古い友だち」

そしてぼくたちの両親は、声をあげて喜びあい、乾杯かんぱいして祝った。

ぼくのママと、オギーのママのイザベルおばさんは、ぼくたちが生まれる前から親友だった。ママとパパがこのあたりに引越ひしてきてすぐのころ、エイムスフォート通りのスーパーマーケットで出会ったらしい。二人とも、もうじき赤ちゃんが生まれるし、通りをはさんでむかいに住んでいたから、いっしょにママ友グループを作ることにした。ママ友グループっていうのは、大勢おおぜいのママたちが集まっておしゃべりしたり、おたがいの子どもを遊ばせたりするグループだ。最初は、ほかにも六、七人のママたちが仲間にあった。まだだれの赤ちゃんも生まれていないうちに、二回ぐらい集まったらしい。だけど、オギーが生まれたら、ぼくたちのママ以外に二人しか残らなかった。ザッカリーのママと、アレックスのママ。ほかのママたちに、なにがあったのかは知らない。

最初の二年ぐらいのあいだ、ママ友グループの四人は、赤ん坊あかぼのぼくらを連れて、ほとんど毎日集まっていた。公園でぼくたちをベビーカーに乗せてジョギングすることもあれば、だっこして川沿いかわぞを散歩することもあったし、ハイツ・ラウンジの店でベビータッチャにすわらせてランチを楽しむこともあった。

オギーとオギーのママが、このグループの集まりに来なかったのは、オギーが病院にもどったときだけだ。オギーは何度も手術を受けなくちゃならなかった。息をしたり飲みこんだりすることだけでなく、ほかにも自然にできないことが、いろいろあったんだ。たとえば、食えることができなかった。

話すこともできなかった。そもそも口を完全に閉じることができなかつた。オギーは、そういうことができるように、お医者さんに手術をしてもらわなくてはならなかつたんだ。でも、手術を受けても、ぼくやザックやアレックスのように、ふつうに食べたり話したり、口を完全に閉じることができなかつた。手術を受けても、オギーはぼくたちと、ものすごくちがっていた。

オギーがほかのみんなとどれだけちがうのか、ぼくは四歳ごろまで、よくわかっていなかったと思う。冬のある日、オギーとぼくは、コートを着てマフラーを巻き、公園で遊んでいた。そして、ジャングルジムのてっぺんの台まではしごを登り、高いすべり台をすべる列に並んだ。あと少しでぼくたちの番というときに、すぐ前の小さな女の子がおじけづいた。それで女の子は、ぼくたちを先に行かせようと後ろをふりかえった。そのとき、オギーを見たんだ。女の子は目を丸くして口を大きく開け、さげび声をあげると、わんわん泣きだしてしまった。気が動転しすぎて、はしごをおりることもできない。その子のお母さんが上まで登って助けなくてはならなかつた。そしたら、オギーも泣きだした。自分のせいで女の子が泣いていると気づいたからだ。オギーは顔をマフラーでかくし、だれにも見られないようにした。イザベルおばさんも上まで登ってオギーを助けなくてはならなかつた。細かいことはよく覚えていないけど、大騒ぎになったのはたしかだ。すべり台のまわりには、ちよつとした人ばかり。ささやきあう人たち。ぼくたちは急いで公園を出た。オギーを抱いて家へ帰るイザベルおば

さんが、目に涙を浮かべていたのを覚えている。

オギーはほかの子とちがうとぼくが気づいたのは、それが最初だった。で、もちろんそれで最後じやなかつた。息をしたり飲みこんだりすると同じように、ほとんどの子どもにとっては、オギーを見て泣くことも、あたりまえのことだったから。

午前7時8分

なんで今朝にかぎってオギーのことを思い出したのか、わからない。うちが引越してからもう三年もたったし、オギーには十月のボウリング・パーティーのときから会っていない。もしかしたらオギーの夢でも見たのかな？ 覚えていないけど。とにかく、目覚まし時計のアラームを止め、その数分後にママが部屋に入ってきたとき、ぼくはオギーのことを考えていた。

「起きてるの？」ママがそつと言った。

ぼくは答えるかわりに、枕を顔の上にかぶせた。

「クリス、起きる時間よ」ママはカーテンを開け、陽気に言った。枕の下で目をつぶっていても、もう部屋がすっかり明るくなったのがわかる。

「カーテン閉めといてよ」ぼくは、ほそつとつぶやいた。

「今日は一日雨になりそう」ママはカーテンを閉めないで、ため息をついた。「ほら、また遅刻したらいやでしょ。今朝はシャワーを浴びなきゃね」

「シャワー浴びたよ。たしか、おととい」

「やっぱり！」

「うえっ！」

「さあ、起きて」ママは枕をぼんぼんとたたく。

ぼくは枕を顔からどかし、大声で言った。「はいはい！ 起きるよ！ 起きればいいんだろ？」

「クリスったら、朝はほんとにきげんが悪いんだから。去年はやさしい四年生だったのに、どうしたのかしらね？」ママは首を横にふった。

「リサ！」

ママは、ぼくに名前と呼ばれるのが大嫌い。だから部屋を出ていくと思ったんだけど、床の上からぼくの服を拾って洗濯カゴに入れている。

「ところでさ、昨日の夜、なにかあったの？ 寝るときに、ママがイザベルおばさんと電話してるのが聞こえたんだ。なにか悪いことがあったみたいだったけど……」

ママはベッドのふちに腰かけた。ぼくは眠くて目をこする。

「どうしたの？ すごく悪いこと？ 昨日の夜、オギーの夢を見ちゃったよ」

「オギーは元気よ」ママはちょっと顔をしかめながら答え、ぼくの目にかかった髪をはらった。「もう少しあとで教えるつもりだったんだけど——」

「なにがあったの？」

「昨日の夜、デイジーが死んじゃったの」

「えっ？」

「かわいそうにね」

「デイジー！」ぼくは両手で顔をおおった。

「つらいわね、クリス。あなたもデイジーが大好きだったものね」